

# TPPはどこへ向かうか？

## メガ協定の挫折と今後の方向性

### 頓挫するTPP

安倍政権はあたかもTPPを日本の最優先課題であるかのごとく、強行採決を辞さない姿勢で国会審議を強引にすすめるが、今年二月に署名されたTPP協定（以下、TPP現行協定）がたとえ今国会で承認されても、それが他の一カ国の早期批准を促すわけではない。およそTPP参加国でTPPの批准プロセスを拙速で進めているのは日本だけである。各国はアメリカ議会での批准が決定しなければ法案を上程しない。すべてのTPP影響評価報告で唯一「TPPによって確実に経済成長する」と評価を受けているベトナムですら、今年中の法案国会提出を見送った。たとえ批准自体に積極的であっても、批准は新アメリカ大統領の就任祝いに贈りたいと考えるのが外交の常識だろう。

TPP主唱者であるアメリカは大統領選挙の終盤戦で、民

確かに大統領選挙と同時に終わる下院議員選挙ではTPP反対派からも大量の落選者が出るはずで、彼らが次に産業界での職を求めて、離任までの最後の投票で変節してTPP賛成に回る可能性はゼロではないが、自らもホワイトハウスを去っていく大統領の甘言にのる議員がそれほど多いとは思えない。

実は、日本に続いてアメリカが早期批准しても、このTPPは容易に発効しない。というのは、過去のFTA（自由貿易協定）で参加国が義務を満たさず、結果的にアメリカの貿易赤字が増加した苦い経験から、アメリカ議会はこのTPPにおいて、各国に義務履行の確約や実績提示を迫り、それを議会が承認しないと協定上の権利を参加国に与えないことになっている。いわゆるCertification（承認）問題だが、これまで日本政府はこの事実を隠蔽してきた。報道もされてはいない。果たして安倍首相自身もこの新しいメカニズムを理解しているかどうかも疑わしい。

日本が批准を急がなければならぬ唯一の理由はおそらく、仮にもトランプ大統領が登壇してTPP協定が破棄されれば、二〇一三年四月の日米並行協議以降、TPPの署名も発効も待たずに、次々と進めてきたTPP関連の規制緩和措置や政策変更、そして今年夏の参議院選挙のためにTPP関連の名目ではらまいたさまさまな補助金や公共事業工事への予算措置（その多くが不可逆的な状況にあるはずだ）などが、一斉に根拠を失う危険性であろう。虚偽の名目で予算を執行したと

主党ヒラリー・クリントン候補そして共和党ドナルド・トランプ候補ともにTPP現行協定には否定的で、再交渉あるいは破棄を主張している。このような状況の中でなぜ日本が批准を急ぐのか？ 誰も合理的説明を見つけないことができない。安倍首相は日本が先行して批准することが、アメリカ議会での批准に弾みをつけることになると主張しているが、嗜飯ものだ。議会でのTPP推進派には「日本に急かされてやることじゃない」と横を向かれ、反対派には「やはり日本に有利な協定だ、日本にまた騙された」と火に油をそそぐ結果に陥ろう。

オバマ政権は、製薬会社など産業界からの選挙資金獲得のために、大統領選挙後のレームダック期間（離任直前でも何政策を打ち出せない「死に体」にある）での議会承認を打ち出さなければならぬ。すでに一月八日の大統領選挙翌週の一日から一七日にかけての審議がアナウンスされている。

この諷刺を避けるには、少なくとも日本は批准したという事実を作らないといけないのかもしれない。

安倍政権の奇々怪々の早期批准はともかく、TPP現行協定の批准と発効が足踏みしている状況において、そもそもTPPとはいったい何なのか、どこから来てどこへ向かうのか、そしてそこから日本はいかなる利益を得るのか、もう一度振り返って考えてみよう。

### TPPはどこから来たのか

(1) 小国凸凹連合としてのP4協定  
TPP構想の元となったのは、ニュージーランド、シンガポール、ブルネイ、チリの四カ国による革新的自由貿易協定、いわゆるP4協定である。いずれも自国だけではフルセットの経済力を持たない国が、それぞれ不得意な部分（凹）を放棄して、得意な分野（凸）に賭けるといふ凸凹小国連合の協定には大きな意義があった。

(2) 超大国アメリカの戦略的参入  
このP4協定の革新性に目を付けたのがアメリカで、WTOのドーハ・ラウンドが長期化し、アメリカの指導力がイラク介入戦略の失敗で低迷する状況で、二〇〇八年のリーマンショック以降、経済不振に苦しむアメリカにとって、国内企業に職と利益をもたらす貿易体制の確立が急務だった。急速な持続的成長が見込まれるアジア太平洋地帯で、アメリカの指導力が発揮できる広域地域貿易体制こそ、アメリカの求め

すとう・のぶひこ 一九四五年、旧満州大連市生まれ。国際政治経済学者、TPP阻止国民会議事務局長。慶應義塾大学経済学研究所博士課程修了。総合商社勤務、東海大学教授などを経て、二〇〇〇年に総選挙で初当選し、衆議院議員を三期務める（民主主義、著書に『現代のテロリズム』(岩波ブックレット)、『政治参加で未来をまもろう』(岩波ジュニア新書)など)。

**首藤信彦**